2022 年 11 月 19 日
科研費基盤（S）：社会性の起原と進化

社会性の起原と進化：人類学と霊長類学の協働による人類進化理論の新開拓

第 9 回若者研究会

１．著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です
Copyrighted materials of the authors

２．研究会基本情報

日時：　2022 年 11 月 19 日（土）　13:00～16:05
場所：　オンライン会議
テーマ：「分配」について
報告者：
　1）田島知之（大阪大学）
　　レビュー「食物分配、互恵的交換」
　　研究発表「オランウータンの食物分配は繁殖へ影響するか」
　2）八塚春名（津田塾大学）
　　レビュー「食物分配、所有」
　　研究発表「観光に従事する狩猟採集民ハッザの食物をめぐる所有と分配」

３．キーワードのレビューと概説

霊長類学キーワード・レビュー「食物分配、互恵的交換」

（田島知之）

他者と食物を分かち合う食物分配は文化によらず人類社会で行われ、同様の行動は人類以外の霊長類でも見られる。霊長類学において食物分配は、所有個体から他個体への無抵抗の食物の移動と定義される。ここで「食物を所有する」とは、ある食物と個体が物理的接触を持つことと定義され、所有個体が落とした食べこぼしの拾い食べや共食を除く。ヒトでは食物の所有個体から積極的に分配が開始される「自発的な食物分配」が多いのに対して、ヒト以外の霊長類では所有個体から分配を行うことは極めてまれであり、多くの場合は所有個体が食物の一部を他個体に取られることを黙認する「受動的な食物分配」とし

て起こる。これは人類学で呼ばれるところの「許された盗み」という形式に近い。分配の対象となるのは、動物の肉や大きな果実、昆虫であり、入手や処理が困難な食物であることが多い。また分配されるのは所有される食物の一部であり、小さい部分や食べかすのような部分であることが多い。

所有個体が食物を手放す要因については、いくつかの仮説による説明が提示されている。まず親子など血縁個体間で起こる食物分配は血縁選択説によって説明することができる。親や近親者から幼い子への食物分配は子の採食や食物レパートリーの学習を助け、子の生存率を上昇させるため、所有個体の包括適応度を上昇させると考えられる。特に子が独自に処理することが難しい食物が分配されることが多い（Jaeggi & van Schaik 2011）。親から子への食物分配に比べて、互いに血縁のない成体間で食物分配が報告される種は少ない。ヒトを除いた 68 種の霊長類を対象とした研究では、そのうち 38 種について食物分配の報告が存在した。 38 種全てにおいて子への食物分配が見られた一方で、非血縁成体間の食物分配が見られたのは異性間で 14 種、同性間で 9 種であったことから、子への食物分配が起源となって非血縁成体間の食物分配が進化したと考えられている (Jaeggi & van Schaik 2011)。

非血縁成体間において食物分配が進化した要因については、食物を分配することで所有個体が将来的にグルーミングや闘争時の支援、繁殖機会といった利益を得ることができるとする互恵的交換仮説によって説明がなされてきた。これまで食物分配について知見が積み重ねられてきたチンパンジーでは、共同で狩猟を行うオス間で獲物の肉の分配が長期的な連合形成に寄与すると報告されている(Mitani & Watts 2001)。また、異性間ではオスからメスへ食物が分配されることが多い。コートジボワールのタイ森林では、長期的に見ればオスがより多くの肉を分配したのは発情中のメスであったとする報告があり(Gomes & Boesch 2009)、ギニアのボッソウでパパイヤ等の栽培植物がオスからメスへ分配され、繁殖機会と交換されたとする報告がある（Hockings et al 2007）。しかしタンザニアやウガンダの長期データの分析からは、肉の分配を行ったオスがメスから受けるグルーミングや闘争時の支援、繁殖機会が短期的に交換される証拠は認められず、互恵的交換仮説は支持されなかった(Gilby et al 2010)。食物分配を食物と他のサービスとの引き延ばされた交換として見る互恵的交換仮説の他にも、食物の所有個体は他個体からの執拗なベギングや攻撃を受けることを回避するために一部を手放しているとするハラスメント仮説あるいは「圧力下の分配」仮説も提唱されているものの、反論もある（van Noordwijk & van Schaik 2009）。霊長類の非血縁成体間、特に異性間で食物分配を進化させた要因についてはいまだ議論が続いており、今後も観察と検証の積み重ねが必要である。

質疑では「サルにも所有概念は認められるか」といった意見が出た。それに対して、霊長類学において食物の所有は体に接触した状態で他者に対して排他的に振る舞う状態を指していること、縄張り、パッチ防衛、配偶者防衛行動のように身体接触がない状態でも排他的に所有を主張するような行動が見られることを回答した。また、「サルの社会に再分

配は起こるのか」という質問に対して、チンパンジーの肉分配などで二次的分配が見られるものの、分配される食物のサイズが極めて小さいために頻繁には起こらないのではないか、と答えた。また狩猟採集民においても獲物をキャンプに持ち帰らず、その場で獣肉を消費することも多々あり、ハンティングに協力的に参加したハンターには利益があるとされる。これはチンパンジーの集団狩猟における協力の様態にも近い（Samuni et al. 2018）ことを答えた。

質疑応答：

- ライオンなどがハンティングし、複数個体でしとめた獲物を一緒に食べるような場合は、「Food sharing」とよぶのか。ハッザの研究をしているフランク・マーロウが本の中で、シェアリング（sharing）の話の導入にライオンの例を使用していた。その際は、共に狩りをする動物が獲った獲物を一共に食べることを「Sharing」と呼んでいたが、霊長類ではどうか。
  → 霊長類学の操作的な食物分配の定義では Food transfer が前提のため、ライオンが共に食べる例は「Food sharing」とよばず、共食（または、伴食 Co-feeding）となるだろう。霊長類学の分野では、排他的に所有されている食物が移動するということが、食物分配の定義として必要である。しかし、霊長類学の研究者が「Food sharing」というものを、他の系統群（例. ライオン）を含めて体系的に研究していないため、そのような議論がこれまでされていない可能性もある。

人類額キーワード・レビュー「食物分配、所有」

（八塚春名）

第 9 回の主テーマは「分配」であり、発表者は「食物分配」と「所有」に焦点を絞り、とくに狩猟採集民社会を対象におこなわれてきた研究をレビューした。狩猟採集民社会では、平等主義的システムにもとづいたバンド内での食物分配がひろくみられ（Lee & DeVore, 1968）、「社会を一貫して支配するのは、分配と共同の原則（田中 1971:94）」であるとも言われてきた。こうした狩猟採集民が実践する食物分配は、「一般化された互酬性に基づく交換である（サーヴィス 1972）」といわれてきた。すなわち、狩猟採集民社会において肉の所有者は、他者に自主的に肉を与えるという「寛容さ」をもっているという論が、人類学の中では長らく受け入れられてきた。

しかしその後の複数の研究において、狩猟採集民が実践する食物分配の概念と、モースの贈与交換やサーリンズの一般化された互酬性との差異が議論されてきた。たとえば

Woodburn（1998）は、タンザニアのハッザを事例に、食物（とくに肉）の分配について、かなりの割合で要求されるが、与え手は分配から利益を得ることがほとんどないといい、そのことから、他者に与えることは義務ではあるが、必ずしも返礼とは結びつかない（つまり、双方向のやりとりとは限らない）と指摘した。さらにウッドバーンは、こうした狩猟採集民の食物分配は、互酬性というよりも再分配（redistribution）のほうが適しているということも提案した（Woodburn 1982）。岸上（2003; 2016）もまた、これらのウッドバーンの論考も引用しながら、狩猟採集民の食物分配のすべてを互酬性という用語で説明することは適切でないとしている。

続いて、所有と関連させて分配を考えると、サーリンズを中心に、狩猟採集民は富を所有することに無頓着だからこそ、食物が分配されると言われてきた。しかし、たとえば市川（1991）の研究などでは、彼らが富の所有や分配に対して強いこだわりと細やかな配慮を見せているとして、所有に無頓着であるという論を批判してきた。平等が強く主張される社会であるからこそ、富や財の蓄積量に差が生じ、権威や威信／依存と被依存という関係や、亀裂や暴力が生じることを避けるための配慮がなされてきたというわけである。このことについて、たとえばボツワナのサンを事例に研究をする丸山（2016）は、ボツワナのグイ／ガナが過去の分配の経験を軽視しているわけではないことや、分配が義務のように見えるのは人々が気を配った結果であると述べた。

以上の発表を受けて質疑では、sharing と distribution の違いに関する確認や、その違いに即自的収益システム／遅延的収益システムの違いが関わっているのではないか、という意見が出た。さらに、田島知之氏による霊長類の分配に関する発表も踏まえて、分配の義務／自発はどのように線引きできるのかという話や、分配、贈与いずれにおいても、その前段階として、所有のあり方の違いが重要なのではないかという議論も出た。その際、たとえばテリトリーのような、「個体どうしが共有する空間的つながり」にまで着目しながらモノのやり取りを見ていくことが重要であろうという意見は非常に興味深かった。サルの場合、身体を離れたモノを所有するということはほとんどないという。だからこそ、このテリトリーに着目する意義があり、ヒトに関しても同じような視点で所有や分配を見てみると新たな視点が獲得できるかもしれないと考えた。

<u>質疑応答</u>：

- 英語で「sharing」と記述されている語を「分配」としているが、「distribution」も「分配」ではないか。レジュメに示されている「分配」に充てる英語はどれも同じか。
  → 「シェアリング（sharing)」、「移譲（transfer)」、「distribution」などと色々とあるがまだ十分に整理できていない。「sharing」と「distribution」の語をどのように使用するかなど、人類学で食物分配についての概念の整理はあまりされていないとみられる。

→ 霊長類学では「食物移動（food transfer）」のなかに「食物分配（food sharing）」が含まれる。

→ 人類学の文献（岸上, 2003）では、「移譲（transfer）」が食物分配形態のなかのひとつの類型として書かれていた。霊長類学のように、「トランスファー（transfer）」のなかの一つが「シェアリング（sharing）」というわけではない。

総合討論：

＜ヒト以外の霊長類における分配について＞

- サルの場合、子どもが果物などとれない時に母親が食べている食物をとりにくることはあるが、母親が子どものためにわざわざ食物をあげるということはほとんどない。母親が食物を食べている時に子どもがそれを取りに来たら、それを許容することはある。
- サルの社会に再分配はあるのか。
  → 一次分配が食物をとった個体から他の個体へ渡ることだとすると、その個体からさらに他の個体の手に渡ることはあると思う（チンパンジーなど）。しかし、人間とサルの分配で最も異なるのは、分配される食物の大きさである。サルの分配の場合、分配される食物は小さく、まずそうな部分をあげる。人間の場合は美味しそうなものを誰かにあげたりすると思うが、サルの場合は他の個体に要求されたまずそうな部分を少しあげる程度のことしかしない。そのため二次分配は生じにくく、積極的・自発的に分配するのではなく要求されたからあげざるを得ないというような感じの分配がなされる。
  → 義務による分配のようなものは霊長類にはあまりないとされる。そもそも霊長類には制度のようなものがない為、そうした分配が生じにくく再分配のようなものも起きづらい。
- 「distribution」、「分かち合い」、「シェアリング」といった言葉の整理をした方が良いとは思うが、実際に整理するとなると大変そうである。

＜「分配」と「贈与」について＞

- 「分配」と「贈与」を切り分けて考えるのは少しおかしいように感じた。「贈与する」というのは想像に基づいて行為を行っている、あるいはその後の返礼というものがあるなど、平等性を崩さないように返礼が行われるというような意識があるかもしれないが、切り離すのも変な感じがする。他個体や他者とかかわりながら自分たちが生きられるそのニッチを開拓していくというような見方もあると考えられており、もっと広い視点から抽象化し関係性を捉えるという方法もあるのではないか。
- 「分配」と「贈与」を完全に切り離さなくても良いと思う。「分配」と「贈与」が異なるとされてきた一番大きな要因は、おそらく返礼を期待するか否かという点にあると

思っている。返礼を期待することが狩猟採集民のシェアリングでは一切見られないということが指摘されている。そのため、「交換」とは異なるといわれているが、必ずしもそうした機会がゼロなのかと言われるとそうではないケースもあるだろう。

＜「贈与」と返礼について＞

- 返礼を期待するというような戦略があって行われるものと、そうでないものの両方に「贈与」という言葉が使われているのが問題だと思う。贈与になんらかの戦略があるとなると、より返礼を得るためにいかに文化的装置を利用して自分に有利になるようにするかというような点も検討する必要があるだろう。
- 「贈与」という用語を考えると、どうしても返済の義務がセットになるイメージがある。返済（返礼）の義務の話になると霊長類を対象とした議論では対処しきれない問題になってくるため、贈与論のような話を積極的に検討することは難しい。
  → 種の内部の話と種の外部の話をいかに扱うかという点については、どこまでを議論したいか、射程に収めたいかが問題になってくる。生態系みたいなレベルに言及するならネットワークの話をすべきかと思うが、誰かの持つものが他の誰かにも渡るというようなインタラクションを前提としたやり取りを考える上ではミニマムに議論した方が良い気もする。

４．研究発表

「オランウータンの食物分配は繁殖へ影響するか」

（田島知之）

オランウータンは東南アジアにすむ人類に比較的近縁な大型類人猿であり、群れずに単独生活を営むことで知られる。しかし、完全に単独ではなく、行動圏は重なり合い、出会った個体同士で連れ立って一時的に遊動することはある。野生のオランウータンにおいて、頻度は少ないものの食物分配が起こることが報告されている。オランウータンにおける食物分配は 18000 時間ほど観察して 96 例ほどの低頻度で起こること、大人の雌雄間でのみ観察されるが直後に交尾が起こるわけではなく、メスは配偶者としてのオスの性的強引さを試す機会になるのではないかと仮説が立てられている（van Noordwijk and van Schaik, 2009）。それはオランウータンでは抵抗するメスを押さえつけての強制的な交尾など、メスに高いコストを強いる性交渉が知られるからである。しかしこれまでのところ、オスの食物分配の強引さによって性行動の強引さが推測できるかどうかについては未検証である。

そこで、先行研究の仮説に基づいた予測を立てて、半野生個体群のオランウータンの行動観察から検証を行なった。具体的に①オスが所有する食物をメスが取ろうとした際に攻撃

的な抵抗を多く見せるオスは強引な性行動を示すことが多い、②抵抗するメスから食物を強引に取ることが多いオスは、強引な性行動を示すことが多い、という 2 つの予測を検証した。その結果、オスが食物の所有者であった時の方が、メスが所有者であった場合に比べて抵抗が起こる割合が低かった。一方で、メスから強引に食物を取り上げるオスでは強引な性器検分（手や口でメスの性器を探る性行動）が多いことがわかった。食物分配交渉に強引なオスは性行動時にも強引であることが多く、メスによる配偶者選択の機会として充分有効であることが考えられる。オランウータンには社会的グルーミングのような社会行動が存在せず、まれに起こる食物分配は雌雄間で相手の行動傾向について知ることのできる社会的インタラクションの場として重要なのかもしれない。

質疑応答：

- オランウータンはオスとメスが常に共にいるわけではないということだった。その場合は交尾の際にハラスメント的だとしても、その後そのオスと離れるならば、メスに大きなコストはないのではないか。
  → 確かに、オランウータンの強制交尾によりメスがけがをすることはない。しかしオスが長時間つきまとうことでメスの採食時間が制限されることや、好まない個体の子を妊娠するリスク、性感染症のリスクが指摘されている。
- むりやり食物を奪うオスに対して、次に出会った際にその個体を避けようとするなどの事例はあったか。
  → 雌雄に関わらず暴力的に食物を奪われた個体は次回から餌場から離れながら様子をうかがうなど、回避している傾向は見受けられた。

「観光に従事する狩猟採集民ハッザの食物をめぐる所有と分配」

（八塚春名）

発表者の研究事例として、タンザニアで観光に従事する狩猟採集民ハッザの食物をめぐる所有と分配について紹介した。本事例で扱うハッザは、1990 年代より観光業に参入しており、日常的に観光によって収益を得ている。富を独占しないことに配慮してきた社会と言われてきたハッザ社会において、観光が生み出す現金収入の多寡がどのように理解されているのかを論じた。

結果として、観光収益によって購入されたトウモロコシ粉はキャンプの構成員で分配されるが、他方、獣肉は、狩猟や解体作業に携わらない人たちには分配されないこともあった。

狩猟や解体に参加しなかった人たちには、そのことへの負い目があるのか、肉の分配を要求すらしないことも多かった。一方で、観光収益はトウモロコシ粉や酒などに変えて分配されていた。つまり、現金稼得という富の偏在が起きやすい場だからこそ、収益を消えモノに変え、それを居合わせる全員で消費することによって、結果として収益の多寡が見えにくくなっていることを考察した。

【参考文献】

市川光雄（1991）「平等主義の進化史的考察」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社.
岸上伸啓（2003）「狩猟採集民社会における食物分配の類型について :「移譲」、「交換」、「再・分配」」『民族學研究』68 (2): 145-164.
岸上伸啓（2016）「『贈与論』再考：人類社会における贈与、分配、再分配、交換」岸上伸啓編『贈与論再考：人間はなぜ他者に与えるのか』臨川書店, p.10-39.
サーリンズ, マーシャル（1984)『石器時代の経済学』山内昶訳, 法政大学出版会.
サーヴィス, エルマン（1972）『狩猟民』蒲生正男 (翻訳), 鹿島出版会.
田中二郎（1971）『ブッシュマン－生態人類学的研究－』思索社.
丸山淳子（2016）「誰と分かちあうのか：サンの食物分配にみられる変化と連続性」岸上伸啓編『贈与論再考：人間はなぜ他者に与えるのか』臨川書店, p.184-208.
モース、マルセル（2014）『贈与論 他二篇』森山工 (翻訳), 岩波文庫.
Lee, Richard ＆ DeVore, Irven (1969) *Man the Hunter*, Routledge.
Woodburn James (1982) “Egalitarian Societies,” *Man* (N.S.) 17(3): 431-451.
Woodburn, James (1998) “’Sharing is not a Form of Exchange’: an Analysis of Property-Sharing in Immediate-Return Hunter-Gatherer Society,” C. M. Hann ed. *Property Relations: Renewing the Anthropological Tradition*, Cambridge University Press.

質疑応答：

- ヒヒは群れで動くため、狩猟する際に 1 頭を狩ったら、群れのメンバーの他のヒヒが襲ってくるようなことはないのか。
  → そうしたことはない。むしろヒヒは群れで動くため、運がよいと一度に複数頭狩ることができるという利点があると認識されている。
- トウモロコシの粉はいつ頃から利用しているのか。
  → 購入して利用する様になったのは、1990 年代の終わりごろからだと思われる。50 年代、60 年代の記述でも、農耕民の手伝いをしたり、交易をしたりし、トウモロコシを入手していたというものがある。わりと昔からトウモロコシを利用していたと思われる。

総合討論：

＜義務的/自発的分配・制度＞

- 義務的な分配と自発的な分配というものに繋がり、接続はあるのか。
  → ハッザの場合、トウモロコシを独り占めすると「分配しなさいよ」という雰囲気になる。しかし、他の食べ物でそうかというと、そうでもない。霊長類で言うベギングやデマンドシェアリングみたいなものに近いのではないか 。
- 獣肉をとってきた後、かなり几帳面にルールに基づき分配するようなことが、狩猟採集民独特のものなのか、人間全般にみられるものなのかというのは興味がある。
  → バテッの場合は、几帳面に均等に分配するというようなルールがないからこそ、政府からもらったものなどは特に早いもの勝ちのような感じになることもある。
  → ハッザでもルールに基づいてきちんと分配するというようなことはあまりみたことがない。だからこそもらえない人がでてくる。ハッザでは、たくさんあれば全員に行き渡るようにみんなでシェアする。しかし、余った肉を干し肉にするとだんだん自発的分配が減り、分ける相手が少なくなる。
- 狩猟採集民/農耕民など、コミュニティにより分配のルールは色々異なる。集団構成が流動的であるからこそルールがゆるやか、あるいはその場の無言のプレッシャーが働くことでなんとなく分配されている感じなのかもしれないし、その逆としてメンバーが割と固定化されているからこそルールがしっかりと決まっているという場合もあるのかもしれない。

＜分配されるものとの関係＞

- ハッザはそれぞれがいる場所で得られる資源によっても分配のやり方が異なる。例えば、畑をもっている人のいる場所では、肉は割ときちんと分配されるが、畑の収穫物は個人の懐に入れられてほぼ分配されない。
  → 観光客が多く来るところでは、「肉は割と適当に分配される」という私が見てきた現象とは違い、分配されている食べ物が逆になっている。同じハッザでも生計手段の違いなどにより異なる。狩猟民ということを前提にして狩猟が中心だと思い込んで議論すると、必ず肉はきちんと分配されているように感じてしまうが、実はそうではない。
  → 嗜好品というか他のものでも代用できるか否かにより分配されるかどうかが決まる部分が大きいと感じる。

＜食物獲得にかかわる個体と分配＞

- 食物分配に注目する理由として協力の進化的基盤という話が少しでていたが、それに関連し「食物の獲得に誰が関わったか」ということと、食物を誰とシェアするのか、誰と食べるのかっていうことは関係あると感じていた。しかし、オランウータンはあ

まり群れで生活せず、オスは一頭でいるという話だったため、霊長類でこうしたことに関する事例はあるか。

→ チンパンジーもなかなか小動物をたくさん捕まえるというのは大変なことなので、動物を捕らえるにはやはり協力が必要だと思う。

→ ヒョウが捕まえた獲物をチンパンジーが集団で奪い取るというような事例があった。まさに協力して他の捕食者から獲物を奪い取って自分たちのものにするというもの。そのため、その集団内では分配が起きる。

- 狩りに参加しない場合は、肉をもらえないのか。

→ 参加していない個体も少しは食べることができる。参加した個体とそうでない個体では差があるがもらえる。

- 人間の場合は、「私は食物の獲得に参加してないから」というような負い目があるのかなと感じることが結構あるが、サルも負い目を感じるのか。

→ サルの場合はもらえるのは少量なので、そうした負い目はないのではないか。

＜分配するものの質と量＞

- 無理やり相手から食べ物をとるような人と付き合うのをやめようというようなことは、人間ではありそうである。逆に、よく食べ物をくれる人と仲良くなるということはあるのだろうか。

→ 観光対応としてキャンプのリーダーと呼ばれる人が定められており、キャンプのリーダーがトウモロコシを買う際にお金を出すなど金銭を管理するという立場になる。そうした場合にトウモロコシをきちんと供給してくれる人と全然うまくいかないリーダーとがでてくる。そうするとキャンプの構成員があの人はやりくりが上手じゃないからとかケチだとかいうことはある。親切、または気前よく分配してくれるリーダーのところに人が集まる傾向はあるようだ。

- ニホンザルでは分配的なことがおきない理由として、果実など一口で食べられる食物がほとんどで分配するほどの大きさではないというのがあると思う。分配できるような大きな食べ物はサルだとあまりない気もする。

→ 人間の場合は協同でハンティングしたり農耕したり採集したりし、それなりの大きさの食物をたくさん集められるから分配できるが、チンパンジーやニホンザルは基本的に目の前にある果実をとって食べることの繰り返しであるため分配みたいな事が起きづらいのかもしれない。

＜所有の意識と即時/遅延型の消費＞

- 果実がたくさん実っている際にはその場で食べることがハッザもよくあるが、その場で食べた後はそれ以上にキャンプに持ち帰ることをする。サルでもその場で果実を食

べた後にさら自分が移動する先にちょっと枝を持って行くというようなことはするのか。

→ オランウータンでは木の枝などを折り、首に引っ掛けて自分が寝るベッドなどに持ち込んで食べることはある。

- 所有のような感覚、採ったものを持ち帰るというような段階からさらに一歩先の、貯蔵するなり貯めておくことは霊長類でもあるのか。人は分配のやり方がとても複雑になっていると感じる。人では、分配するにしても贈与するにしても、その前の段階として獲得した後の食物の扱い（貯蔵など）が重要になってくるように感じた。

→ 即時型消費システムと遅延型消費システムの違いみたいなところが人類学で議論されているが、ヒト以外の霊長類ではそうした事例はない。基本的には熱帯の動物であるため、食物は腐ってしまうこともあり食べられるものは食べて脂肪にかえるという戦略をとる。そのため、食べずにどこかにとっておく、貯蔵するということはない。

＜排他的な所有＞

- 食べないでどこかに隠してしまう、地面に埋めたり隠したりし、それらを誰かが持っていくことに対し怒ってそいつを追いかけるなどの事例があったら、所有感がある。自分の体から離れた状態での所有を人間は認知できるだろうが、サルではどうだろうか。

→ ニホンザルにおいて、メイトガードという現象があり、オスがある種メスを所有しているような瞬間はある。しかし、目の前にいるメスが他のオスと交尾しようとしたり、他のオスに触れたりすることはある。

→ 群れレベルの話ではあるが、ある食べ物のパッチの周りを群れで遊動しながら他の集団から防衛するみたいな、縄張り的な所有みたいなものは拡大解釈するとあるのかもしれない。手から離れていても所有している/されているという感じはサルでもあるとは思う。

＜相手との関係＞

- 研究者側のカテゴリとして「分配」や「贈与」などがあり、それに現実をあてはめていくが、実はもっと抽象的なレベルで共通性を抽出できるやり方があるのではないか。たとえば財産のようなものが共有されているかとか。分配や贈与などを考えるには所有の意識がどのようになっているかというようなことも考えた方がよいだろう。

→ モノだけでなく相手との関係性も関連すると思う。家族なら共に使用してもよいがよそ様だとダメなものがあるように、同じ群内なら利用してもよいが群外の相手ではシェアできないというような。こうした観点から社会性についても考えられそうである。

→ 所有権の議論は割と社会から切り離された個が前提とされていると思うが、この若者研究会ではそうした点も見直しつつ議論できるのではないだろうか。もっと広い繋がりや帰属なども含めて社会という言葉を考えると、society という言葉は association に由来するので、その繋がりというものが空間を満たしている人物とかモノ、そんな全体というように考えられる。

- ボノボで面白いといわれるのは、目の前に同じものがあるのにわざわざ他の人からもらうことをする点である。これについては食べ物をもらうのはきっかけにすぎず、社会的なインタラクションを欲しているのだと議論されたりしている。
- ウッドバーンの議論で、5 人平等に分配するのは個人の自由を確保するためという話があるが、丸山（2016）は何か共同性や絆を保つために平等に分配するみたいなことも議論している。絆を保つというと集団がある程度一緒にいる必要がある気がするが、流動性の高い人達がキャンプを移動し、その時々その時たまたま一緒にいる人々で平等な分配がおこなわれて離合集散しているとなると、逆に流動性が高い人びとが仲良くするために平等な分配が行われているともみることができる。

→ 個人が自由に移動するが個々人はそれぞれこれまで付き合った関係性が何かしら必ずあり、例えば久しぶりに会った人でも「この人前私あの時一緒にあそこで分配したよね」、という関係性があったりする。しかし、それは先に議論された贈与に対する返礼とも少し異なる気がする。自分がその人にダイレクトにお返しするのではなく、自分が生きてきた共同性とか絆みたいなものに対して返礼するというように考えると、一方向的なものにみえる返礼もやっぱり結果的には共同性とか絆を保ち続けようとするっていうことに繋がっていくと思う。

＜オランウータンのオス-メス関係と分配/贈与＞

- 食べ物をたくさん与えているオスの方が多くの子孫を残しているか、ということも議論されてきたが、実はそんなことはなく立場の弱いオス達はどんどん食べ物を持っていかれてしまうというのが現実だった。さらにオランウータンの場合は食べ物が実際どの程度分配されているかはさほど重要ではなく、分配する際のインタラクションの内容や関係の方により意味がある。だからペアごとに分析するとそのオスとメスの組み合わせの中では合意になりやすいみたいな傾向があるように読み取る方がよさそうである。
- オランウータンの分配は 3 年ほどかけて少ないデータセットを得られるというような状況では検証が難しく、さらに過去に不快な思いをした同士は既に分配をしていない可能性もある。
- オランウータンのオスのメスにもてる基準みたいなものに、食物分配/贈与のようなことが関わっている可能性はあるのか。

→ そうした food for sex のような交換の理論的前提があり研究が試みられてきたが、これまでの検証結果はポジティブなものとネガティブなものがあり、議論は終わっていない。もし食物を手放したらメスにパートナーとして好まれやすくなるという単純な公式が存在するのなら、オスは毎日競い合ってどんどん分配した方が適応的と考えられるが、サルの間では食物分配は頻繁でない行動であることから、雌雄間のパートナー選択基準において食物分配の頻度があまり重要ではないとも考えられる。

（以上）